

# 渋川市赤城町所在・ 滝沢天神遺跡 2 号住居出土古式土師器の位置づけ

—— 群馬県渋川地域の古式土師器の編年作業を通して ——

深 澤 敦 仁 ・ 小 林 修

- |                         |              |
|-------------------------|--------------|
| 1. はじめに                 | 4. 地域編年からの検討 |
| 2. 動向・目的                | 5. おわりに      |
| 3. 滝沢天神遺跡 2 号住居出土の古式土師器 |              |

## —— 論文要旨 ——

本稿は、群馬県渋川市赤城町所在・滝沢天神遺跡 2 号住居出土の古式土師器を編年的に位置づけることを目的とする。組上にのせる古式土師器は、S 字状口縁台付甕を含む甕および壺の一括資料である。こうした資料は、渋川地域においては出土事例がさほど多くなく、当該地域の編年基準資料のひとつとなりうるものである。

そこで、まず、対象資料を既説を参考にしておおよその位置づけを行い、次に、近年の調査資料も含めた、渋川地域の古式土師器の土器様相の変化を検証し、対象資料の位置づけを行った。

その結果、滝沢天神遺跡 2 号住居出土の古式土師器は、「本稿時期の 3 期」、「古墳時代前期新段階」に位置づけることが妥当である、という結論を導き出すこととなった。

### キーワード

対象時代 古墳時代前期  
対象地方 群馬地域北部（渋川地域）  
研究対象 古式土師器

## 1 はじめに

本稿は、群馬県渋川市赤城町所在の滝沢天神遺跡2号住居より出土した甕形土器および壺形土器（以下、「形土器」は省略）の編年の位置づけを行う、研究ノートである。

## 2 動向・目的

### (1) 動向

群馬県地域は元島名将軍塚古墳や前橋八幡山古墳などの大型前方後方墳、そして前橋天神山古墳をはじめとする大型前方後円墳の存在などが示すように、東日本において屈指の成熟した古墳時代前期社会を形成する地である。こうした特質をもつ群馬県地域において、S字状口縁台付甕（以下、S字甕）をメルクマールとした「石田川式土器」と呼ばれ続けている土器群は、古墳時代前期の土器群として、今もなお象徴的存在であり続けている。

成熟した古墳時代前期社会が成立した地域に東海地方の何処かを故地とするS字甕が象徴的に存在するともなれば、この「石田川式土器」と呼ばれ続けている土器群が波及・定着し、存在しつづけた背景には、古墳時代幕開けの重要な歴史性があるのでは？、と考えることはごく自然な考え方である。

しかし、例えば前期古墳の分布のあり方ひとつをとってみても、それは群馬県地域全体にくまなく存在するという状況ではなく、その存在の主体は群馬県地域南部（図6での地域1）や那波地域（図6での地域2）、新田地域（図6での地域4）といった地域に偏っている。こうした状況は土器の様相にも垣間見られ、群馬県地域を地形や地勢などの視点から複数の属性により地域区分し（図6）、それぞれの地域毎における土器様相をうかがってみると、それらは実に様々な様相を呈していることに気づくのである。そして、それらのうちいくつかの地域においては、S字甕とその仲間たちはまさに象徴としての存在にしかすぎないのでは？、と思わんばかりの客体的存在であることも次第に明らかとなり、その存在感は、必ずしも群馬県各地域において同様に網羅するものではないことも明確になってきている（田口1998、若狭1990、深澤2005など）。したがって、この群馬県地域の古墳時代前期社会の複数の様相を具体的にかつ明確に把握し、地域を越えての共通要素を探ることや、独自色を抽出するためにも、地域毎の土器様相の把握は最も基礎にあり、絶対必要条件であることは、間違いない。そして、それらに基づいた地域相互の比較検討が現時点での大きな課題であり、その解決がいそがれているのが現状である。

ここに取り上げる「滝沢天神遺跡」が所在する群馬県北部、渋川市地域（この地域は、旧群馬郡の北部が大半

を占める地域であることから、以下では「群馬県地域北部」と呼称する）は、古墳時代前期の群馬県地域の中では、やや異質な様相を呈する地域である。

その様相とは、次の通りである。有馬遺跡（佐藤1990）に代表される、鉄器副葬の墳墓を生み出すような東日本においては極めて成熟した弥生時代後期文化を有しながらも、その後、古墳時代前期をむかえてからは前方後方・前方後円墳の築造には至らないのである。こうした様相からは、今日までに検出・出土した遺構・遺物に基づく限りでは、古墳時代に入ってから飛躍的な展開を認めることは難しづらい。そして、その様相は、群馬県地域北部と同じように成熟した弥生時代後期社会を形成しながらも、その後に前方後方墳・前方後円墳を築造する地域力を獲得し、大きく展開していった群馬県地域南部や、弥生時代後期段階には閑散した地域でありながらも、古墳時代前期に至り飛躍的に成熟した社会を形成した那波地域や新田地域などとは大きく異なっている。

こうした様相の差異については、かねてより複数の研究者から指摘され続けているところであり、その歴史性についての言及もなされてきている（若狭1990、田口1998、大木2002など）。この様相理解は、今もなお大きく変わるころではなく、筆者らも概ね賛同するものである。

そうした現状の中、近年、この様相をより詳細に理解することのできる北町遺跡（長谷川1996）や三原田三反田遺跡（小林・長井2001）などの調査資料の公表が相次ぎ、改めて検討を加えることが可能となってきた。

### (2) 本稿の目的

そこで、本稿では群馬県地域北部の古墳時代前期の様相を理解するための基礎作業として、調査資料が公表された滝沢天神遺跡2号住居出土の古式土師器（小林2005）を群馬県地域北部の土器編年の中に位置づけることを本稿のひとつの目的とする。

この資料の詳細は後述するが、その内容はS字甕を含む一括資料であり、群馬県地域北部ではその主体的な存在が示唆されつつも、今ひとつ実態が不明確であった時期のものである。ゆえに、一資料でありながらも、これを地域編年の中に位置付けることは、当該地域におけるS字甕のありかたをうかがい知る良好な資料と考えられるのである。

さらに、当然のことながら、この目的を達成させるためには当該地域の古墳時代前期の土器編年を、再度検討・構築する必要がある、このことを本稿におけるもうひとつの目的とする。

この地域の古式土師器の様相推移については、既にいくつかの提示がある（田口2000、深澤1998など）。それらは概ね現時点においても異論があるものではない。しかし、先述したように、北町遺跡や三原田三反田遺跡と

いった近年の調査資料を加えての具体的な検討は、まだその余地が残されていると思われる。ゆえに、この点についても複眼的な視点から改めて土器編年（試案）を提示する。

なお、執筆の分担については、3(1)(2)を小林、1・2・4・5を深澤がそれぞれに執筆し、3(3)については小林・深澤が両者で協議し、深澤が執筆することとした。

### 3 滝沢天神遺跡2号住居出土の古式土師器

#### (1) 遺跡の概要（図1）

渋川市赤城町は、上毛三山のひとつである名峰赤城山の西麓に位置している。北は沼田市・利根郡昭和村、東は勢多郡富士見村、南は渋川市北橘町（旧勢多郡北橘村）、西は蛇行する利根川を挟んで旧北群馬郡子持村（現在は渋川市）と接しており、市町村合併以前（平成18年2月20日）は利根郡と勢多郡、北群馬郡の三郡域の境界に位置していた。

地形的には、赤城山の外輪山である鈴ヶ岳（標高1564m）から標高約800m付近までの原生林に覆われた山体面、そこから標高約300mまでの耕作地や雑木林、居住域が散在する山麓面、山麓裾部に発達した断崖下には水田地帯と居住域が広がる河岸段丘面に大別される。

地質的には、利根川左岸ならびに天竜川に沿って発達した河岸段丘面では、礫・砂・粘土・ロームにより構成される洪積層が広がり、断崖上の山麓面では第四紀の火山噴出物である凝灰角礫岩層が基盤となっている。

渋川市赤城町域は基本的に西に緩傾斜する地形を呈し、地質的には山麓裾部に発達した断崖によって大別され、現在の生活圏は断崖を挟んで山麓面と河岸段丘面に集中している。また、榛名山の北東域に位置する渋川市の北側（旧子持村）から東側（赤城町）、そして昭和村を範囲とした地域一帯は、6世紀中頃に噴火降下した火山テフラである榛名伊香保軽石（Hr-FP）によって厚く地表下が覆われているため、地表面の観察から6世紀（古墳時代後期）以前の遺跡の存在を把握することは極めて困難な地質的条件を備えている。

滝沢天神遺跡は、JR上越・吾妻線渋川駅より北東へ約5kmほどの地点に位置しており、赤城山西麓に発達した急峻な断崖上に展開する谷地と丘陵の連鎖による山麓丘陵上（標高340m）に立地している。遺跡からは、西方に優美な榛名山の姿を一望でき、昭和31（1956）年までは勢多郡横野村に属していた。当地域は古くは南雲郷と呼ばれていたようで、古代には『和名類聚抄』にある勢多郡九つの郷のひとつ深渠の地域であった可能性が推察されている。

滝沢天神遺跡では、A・B・Cの各地点において、計3回の発掘調査が赤城村教育委員会が調査主体となって

実施されている。

A地点の発掘調査は、個人専用住宅の建設事業に伴い平成16年5月27日～6月28日（面積328.16㎡）にかけて実施されている。なお、A地点の西側に位置するB地点の発掘調査は、県営農村振興総合整備事業横野地区の事業実施に伴い平成16年7月1日～9月30日（面積1,283㎡）にかけて実施されており、更に西側に続くC地点の発掘調査は、地方特定道路整備事業の実施に伴い平成16年9月15日～平成17年1月6日（面積572.67㎡）にかけて実施されている。A・B・Cの各地点を併せて、縄文時代前期から後期の住居跡5軒、弥生時代後期末葉から古墳時代中期にかけての住居跡19軒（暫定認定含）等が確認されている。A・B・Cの各調査地点は同一の台地上で隣接しているため、調査遺構の時期や住居形態などに差異は認められず、縄文時代と弥生・古墳時代を主体とした一連の複合集落遺跡であることが理解される。

#### (2) 2号住居の概要（図2・3、写真1・2）

古式土師器の良好な資料が出土した2号住居は、A地点（調査区）の座標X=57200～57210・Y=-70750に位置する。

6世紀初頭降下の榛名渋火山灰（Hr-FA）下の黒褐色土層を基準として遺構確認を実施したところ、Hr-FP（6世紀中頃降下）及びHr-FAが窪地（レンズ状）堆積している部分が確認でき、比較的規模の大きな竪穴式住居跡が埋没している状況を推定することができた。確認面及び掘削調査の段階では、特に重複する遺構は認められず、調査の結果、6.10×5.60m（面積34.16㎡）規模の隅丸正方形に近い平面形態の竪穴式住居跡であることが確認できた。主軸方位は、N-23cm-Eで、確認面からの掘削残存深度は約35cm程度であった。床面は平坦で、炭化材を多く含む暗黒色土が主体であった。壁溝の掘削は認められず、柱穴が対角線上に4ヶ所確認できたことから、上屋は4本柱の建物構造であったことが推定される。柱穴は、掘り方面で直径約20cm、深さ約30cm程度であった。床面中央部の北側壁寄りにおいて、まとまった焼土の存在が確認されており、本住居跡の炉と推定される。また、床面南西隅の壁寄りの部分において直径約1m、深さ約35cmを測る穴が確認でき、その形態から貯蔵穴と推定される。特に、貯蔵穴の上面付近の床面にて甕と有段口縁壺・S字甕（図4-2・4・6）、北東側の床面にて甕とS字甕（図4-1・3）、貯蔵穴の底面付近から小形壺1点（図4-5）等が相伴遺物として出土している。

在地系の甕、そして東海系の有段口縁壺とS字甕といった古式土師器としては良好な資料が1軒の住居跡からまとまって出土しており、今後の群馬県における古式土師器研究の基準資料になるものと考えられる。

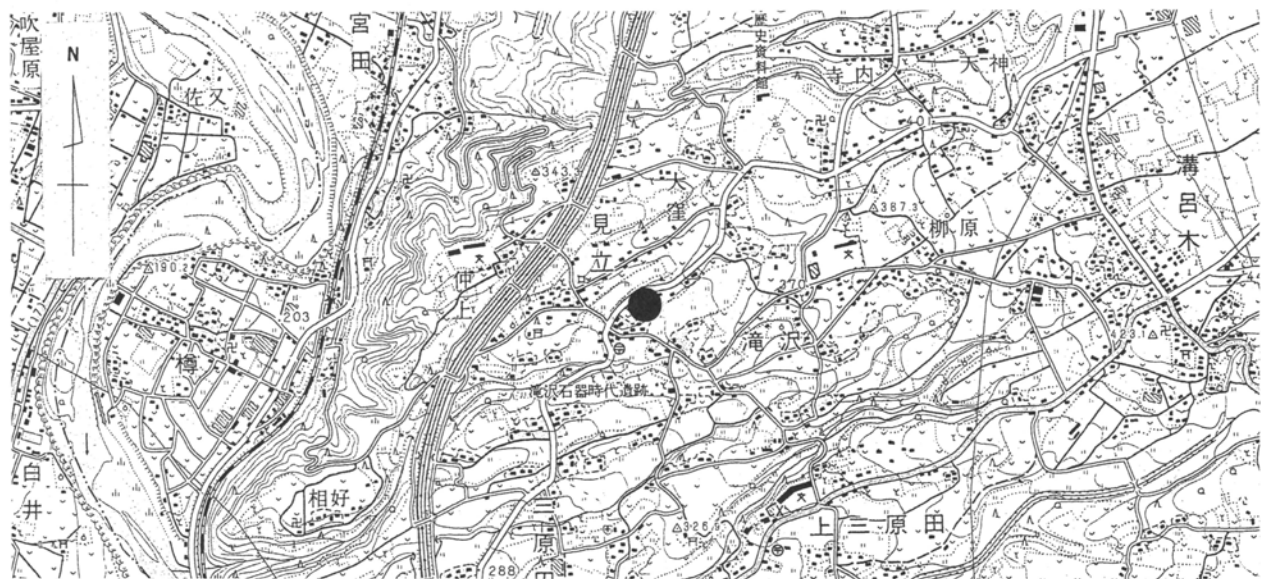


図1 滝沢天神遺跡位置図（国土地理院 1/25,000「鯉沢」）

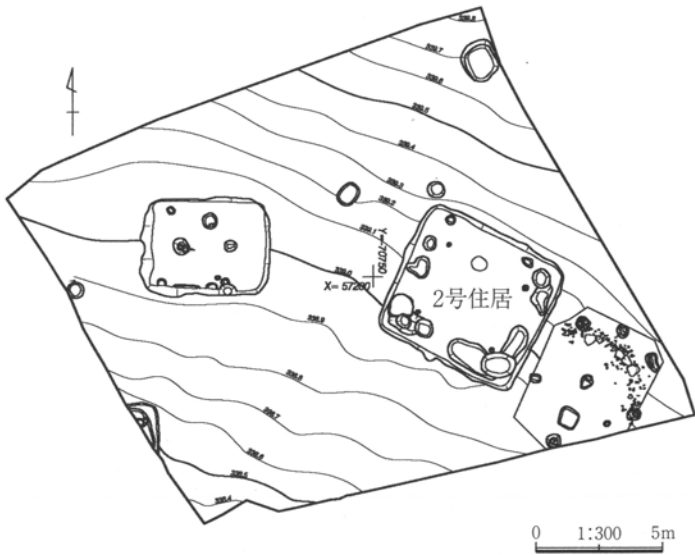


図2 滝沢天神遺跡 A地点調査区全体図



図3 2号住居 平・断面図



写真1 2号住居跡全景（南西から）



写真2 2号住居跡の遺物出土状態（上から）



### (3) 遺物の観察

#### 【甕1】S字状口縁台付甕(図4-1)

法量…器高28.6cm、口径13.5cm、体部最大径23.0cm、底部径9.7cm。

形態の特徴…S字状口縁は直立気味であり、ややシャープさを欠いた弱めの屈曲を呈する。体部は倒卵形を呈し、最大径は中位より上にある。最大部の張りは器高に比して、やや少なく、全体として縦長の印象を与えている。台部は内面に折り返しを持つ。

技法の特徴…口縁はナデにより丁寧に作られている。頸部外面は屈曲を強調するための沈線が部分的にのみ施され、頸部内面はナデのみが施されている。体部外面はケズリで成形後、斜位のハケを胴部最大径の位置より下では左上～右下方向に、胴部最大径の位置より上では右上～左下方向に、施している。ハケの施し方は、特に下半分においては雑であり、成形段階のケズリ痕がそのまま露出している箇所も多く認められるほどである。なお、肩部への横線はない。体部内面はヘラナデを施している。台部は外面では斜位のハケ後、ナデを施し、内面ではユビナデを施している。

#### 【甕2】S字状口縁台付甕(図4-2)

法量…残存器高9.8cm、底部径10.9cm。

形態の特徴…体部の下部と台部のみの残存である。台部は内面に折り返しを持つ。

技法の特徴…体部外面はケズリで成形後、斜位のハケを左上～右下方向に施している。ハケの施し方は雑であり、成形段階のケズリ痕がそのまま露出している箇所も認められるほどである。体部内面はヘラナデを施している。台部は外面では斜位のハケ後、ナデを施し、内面ではユビナデを施している。

#### 【甕3】単口縁甕(図4-3)

法量…器高28.0cm、口径13.0cm、体部最大径24.0cm、底径8.0cm。

形態の特徴…口縁は短く、直線的に外斜し、口縁中位にはわずかに稜をもつ。なお、口縁端部は丸くまとめられている。頸部は「く」の字にしっかりと屈曲する。体部は球形を呈し、最大径は中位にある。底部は平底で、やや上げ底風になっている。

技法の特徴…口縁は内外面ともハケで丁寧に整形されているが、外面はそれに加えてナデを施している。体部外面はケズリ後、タテハケを施し、タテミガキで整形している。うち、特に体部外面下半は丁寧なミガキが施されている。体部内面は丁寧なハケが全面に施されており、ミガキによる丁寧な整形が施されている状況は認められない。

#### 【壺1】有段口縁壺(図4-4)

法量…器高33.4cm、口径19.0cm、体部最大径25.5cm、底径6.0cm。

形態の特徴…口縁は大きく広がり、端部でわずかに内湾する。口唇部はつまみ上げ処理により、明確な稜をもち、外面には僅かに面をもつ。口縁内外面ともに中位には明確な稜(段)をもつ。頸部はやや直立的に立ち上がり、特に内面においては直立しており、口縁部との境の屈曲は明瞭である。体部は球形を呈し、ほぼ中位に最大径をもつ。底部は平底である。なお、全体的に器厚は薄い。

技法の特徴…口縁～頸部の外面はナデ調整後、丁寧なミガキを施している。口縁内面も丁寧なナデを施し、頸部内面は斜横位のハケを施している。体部外面はケズリ・ハケでの成整形の後、全面にミガキによる整形を施している。体部内面は全面にナデを施した後に、部分的にハケを施している。

#### 【壺2】単口縁壺(図4-6)

法量…器高30.0cm、口径14.0cm、体部最大径23.4cm、底径7.7cm。

形態の特徴…口縁はわずかに外反気味に開く。全体的に肥厚であるが、特に口縁端部はより肥厚に作られている。頸部は緩やかに「く」の字に屈曲している。体部は球形を呈し、最大径は中位よりわずかに下にある。底部は肥厚な平底である。

技法の特徴…口縁から頸部にかけての内外面はナデを施している。体部外面はケズリ、ハケによって成整形されており、その後にミガキを施している。体部内面は全面にナデを施している。

#### 【壺3】単口縁壺(図4-5)

法量…器高8.1cm、口径6.7cm、体部最大径7.5cm、底部径3.2cm。

形態の特徴…小型の壺であり、口縁は直線的に開く。口縁端部は細く仕上げられている。頸部は「く」の字状に屈曲し、体部は中位に弱い屈曲が認められ、所謂「算盤玉」状を呈する。底部は平底であり、やや上げ底風になっている。

技法の特徴…口縁～頸部の外面はナデ調整を施しており、内面はハケ調整を施している。体部外面はケズリ調整を全面に施した後に、上半部のみハケ調整を施している。体部内面はナデ調整を施している。

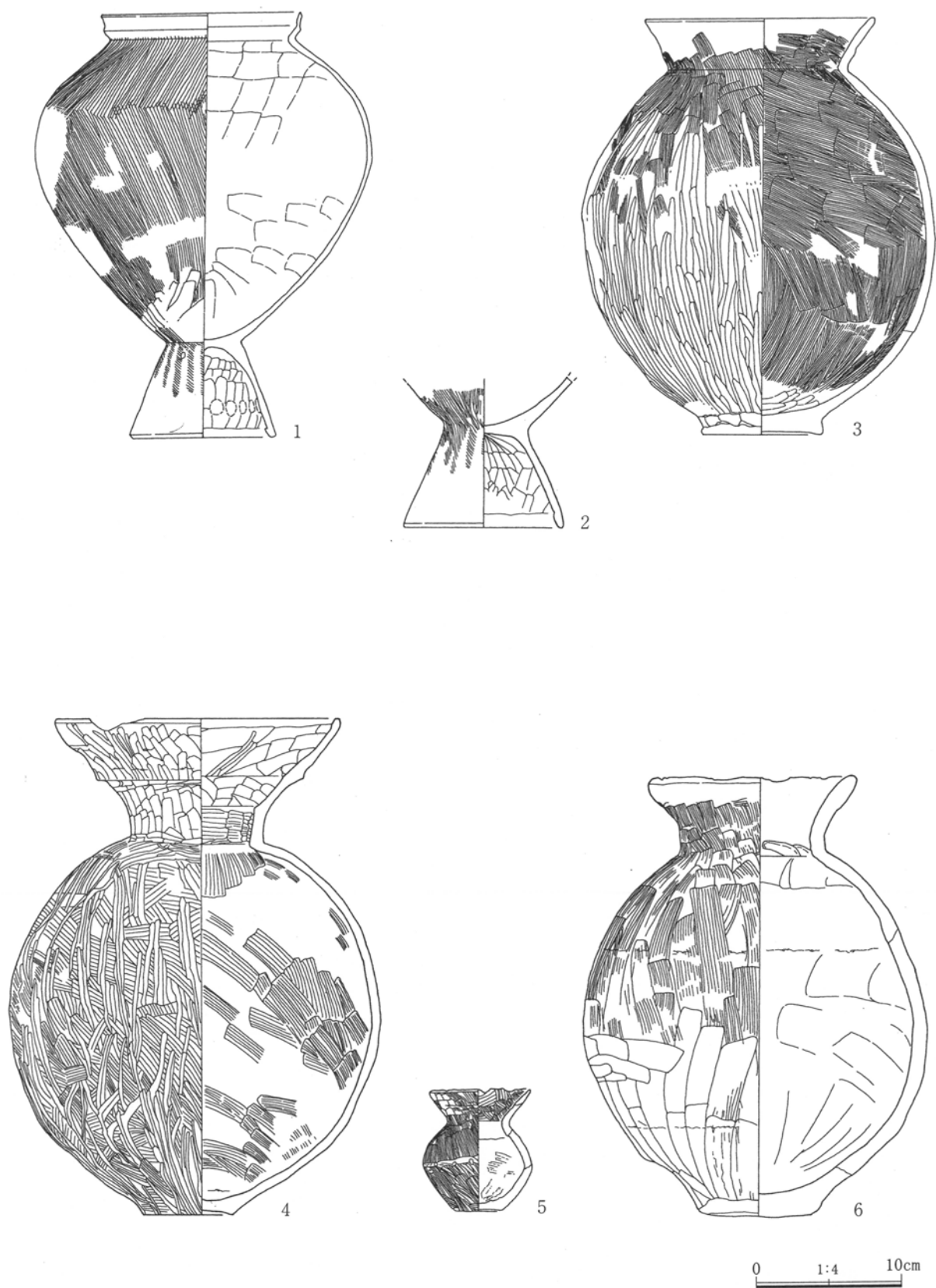


図4 2号住居 床面及び貯蔵穴内出土遺物

4) 既説からの位置づけ

これら資料の編年の位置づけを既説を参考にと次のように考えられる。

甕1は、直立気味で弱めのS字状屈曲を呈する口縁部の形状や最大部の張りが器高に比してやや少ない胴部の張りをもち、全体としてやや縦長の印象を与えている体部の形状や折り返しを内面に持つ台部、さらにはケズリ痕がそのまま露出している箇所が散見される程度の体部へのハケの施し方や肩部横線の喪失などの特徴からは田口分類I Vc類(田口1981、田口2000)に準じるものと考えることができる<sup>(1)</sup>。

甕2は、体部下位から台部のみの資料のため、甕1と同等の位置づけは困難だが、僅かな残存資料の特徴からは、甕1と同様のものと推測される。

甕3は、群馬県地域における単口縁甕の型式変化の詳細な分析がなく、明確な位置づけは困難である。しかし、体部内面調整に樽式甕に通有の所謂「甕磨き技法」(青木・飯島・若狭1987)が採用されていないことから、樽式系甕とは異系統であると考えられ、よって深澤の提示した変遷案(深澤1998)の3・4期以降と位置づけられよう<sup>(2)</sup>。

壺1は、群馬県地域における集落出土品の型式変化を論じた分析はないため、詳細な位置づけは難しい。しかし、群馬県南部地域でこうした壺が集落遺跡に出現する時期を考慮すると、若狭徹氏と深澤が提示した編年案(若狭・深澤2005)の「古墳前期(中段階)」以降と推測することが妥当である。

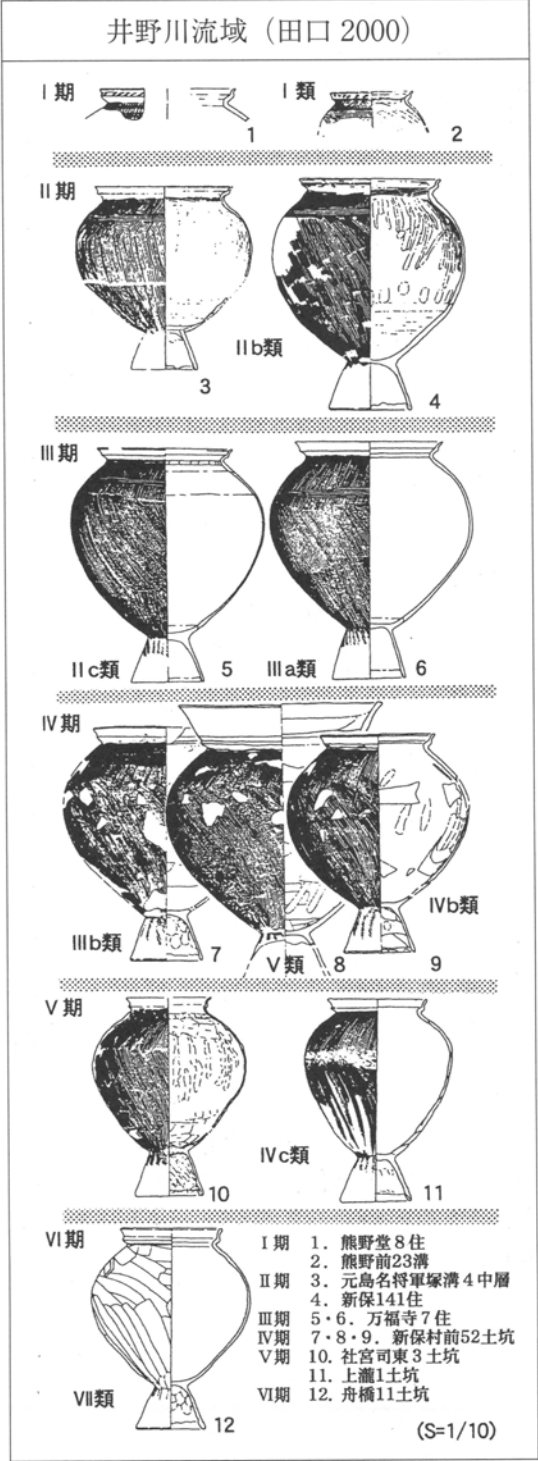
壺2は、既説による位置づけは難しいため、ここでの位置づけは保留としたい。

壺3も詳細な型式変化の分析がないため、その位置づけは困難である。だが、深澤の提示した4世紀後半から6世紀前半にかけての土器編年(深澤2001)に基づけば、Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。

以上のことから、本資料は、田口氏の時期区分でのⅣ～Ⅵ期に概ね位置づけることがよいのではないかと推察できよう(図5・表1)。

田口氏 S字甕編年	深澤地域別 変遷	若狭・深澤 編年	深澤編年	甕1	甕2	甕3	甕1	甕2	甕3
(田口2000)	(深澤1998)	(若狭・ 深澤2005)	(深澤2001)						
I期	1期	古墳前期							
Ⅱ期	2期	古段階							
Ⅲ期	3期	古墳前期							
Ⅳ期	4期	中段階	I期					?	
Ⅴ期		古墳前期	Ⅱ期						
Ⅵ期	5期	新段階							
			Ⅲ期						

表1 既説を参考として推測できる位置づけ



I類…口縁部刺突紋が指標(赤塚A類に対応)  
 II類…口縁部刺突の喪失、頸部内面ハケメが指標。口縁形態・肩部横線等の属性によりa・b・c類に三細分(赤塚B類古・中に対応)  
 III類…頸部から下がった肩部横線、頸部内面ハケメの喪失、胴部外面ハケメ以前のヘラケズリが主な指標。胴部・肩の張る球形から長胴化、口縁端部一面をもつ・沈線化・丸く仕上げる等の属性でa・bに二細分  
 IV類…肩部横線の喪失、胴部外面のハケメ以前のヘラケズリが主な指標。胴部・肩の張る球形から長胴化、口縁端部一面を持つ・沈線化・丸く仕上げる・口縁の立ち上がり・外に開く・上部が立ち上げる等の属性によりa・b・c類に三細分  
 V類…通常のS字甕口縁部の上部に拡張部が付加される(所謂山陰系甕との折衷)・通常S字甕口縁の3倍の程長い口縁部が多い。  
 VI類…V類亜種か、模倣された「S字甕もどき」か、位置づけ保留。  
 VII類…胴部外面ハケメの喪失。

図5 井野川流域におけるS字甕編年(田口2000を引用)

### 3 地域編年からの検討

#### (1) 対象地域の設定

滝沢天神遺跡を含む「群馬地域北部」は、古墳時代前期という時期を対象とする場合、「渋川地域」「榛名山東麓・赤城山西麓地域」などと呼ばれてきた地域を指すものであり、現在の行政区でいえば、市町村合併後の渋川市域がその領域である。

この地域は、関東平野の北端部に位置し、榛名山の東麓と赤城山の西麓が向かい合うような近さで広がっている。さらに、その間を利根川が南流し、そこに吾妻川が合流する地域でもある。ミニマムなエリアに山麓部・丘陵部と平野部、そして地域の幹線河川が合流するという地勢的に多岐に富み、それゆえに流通の要所となり得るエリアといえよう。ここでは、この「群馬地域北部」を分析の対象地域に設定する。

#### (2) 地域の概観

「群馬地域北部」については先述の通り、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての社会動向には、後に前方後方墳や前方後円墳の築造を実現させる新進の地力を獲得する「群馬地域南部」や「那波地域」「新田地域」とは異なる展開が認められる(図7)。この点については、既に田口一郎氏や若狭徹氏、大木紳一郎氏らによって言及されていることである(田口2000、若狭2000、大木2002など)。

こうした地域性が論じられる中、当該時期の古式土師器の様相を振り返ってみると、所謂「在地化したS字甕が盛行する時期(=田口氏のいう”古墳時代前期中～新段階”)の本地域の様相がいまひとつ明確になっていないと思われる。そうした現状にあるのは、おそらくは様々な状況から鑑みるに、煮沸形式としてS字甕が一定量、器種構成の中に参画していることは十分推測できるのであるが、その時期の良好な出土状況をもった、まとまりのある遺跡の調査が実現しなかったからだと思われ、ゆえに今日に至るまでその具体的な姿が説明できなかったのであろう<sup>(3)</sup>。

よって、近年の良好な調査資料を盛り込んだ再分析や、その結果を踏まえての既出の資料の再分析に基づき、従来不明であった時期のことを再度位置づけ、見直しをつけておくことは、これからの群馬県地域の古墳時代前期社会の分析を総括的に行う基礎作業として重要なものとなるはずである。

#### (3) 研究抄史

総括的な動向については、田口一郎氏、若狭徹氏、荒木勇次氏、深澤敦仁などの分析がある。

田口氏は、本地域の調査資料の希薄さの中で、S字甕が主体をなすであろうことを示唆し(田口1998)、さらには、S字甕の波及と定着を論じる中で、群馬県南部地域との波及・定着の差異を改めて指摘した(田口2000)。

若狭氏は、S字甕波及期の様式変革と集団動態を論じる中で、本地域の様式変革が地域内においても一様でないことを指摘した(若狭2000)。荒木氏は、本地域の弥生時代後期終末の動向を再整理する中で、古墳時代前期の状況にも触れている(荒木2000)。深澤は、本地域の土器様相を樽様式が主に北陸系土器の流入によって変革していくことを論じ(深澤1998)、また、赤城村(現・渋川市赤城町)内の古式土師器の様相から在地化したS字甕が一定量様式内に組み込まれて行くのではないかということを示唆した(深澤2002)。

各遺跡資料を中心とした分析には、小林良光氏、大木紳一郎氏、深澤の指摘がある。小林氏は、行幸田山遺跡の報告の中で、同遺跡の資料を位置づけることを目的とする中で、渋川市域の古墳時代前期の様相について論じた(小林1988)。大木紳一郎氏は、群馬県北部の弥生時代後期の動態論を論じる中で、渋川地域の古墳時代初頭の土器様相についても示唆的な言及を加えた(大木2002)。深澤は、赤城村(現・渋川市赤城町)・三原田三反田遺跡の資料を位置づけることを目的とする中で、赤城山西麓の山麓地域に所在する遺跡群の土器組列を行った(深澤2002)。この3者の遺跡単位での編年や位置づけでは、それぞれに良好なセット関係をもつS字甕の出土資料が少ないことにも起因してか、S字甕自体にはほとんど言及がなされていない。ところが、後に分析の対象ともなる有馬条里遺跡(坂口1989)や北町遺跡(長谷川1996)などでは、当該地域としては多量のS字甕が出土しており、こうした遺跡の資料を積極的に俎上にのせた議論が必要とされている。

#### (3) 時系列整理のための前提

本地域の土器様相の把握のために、その組列を検証する前提として、先行研究の中から基幹とすべき型式変化を踏まえる必要がある。それは次の4つと考える。

#### 樽式・樽式系土器

これに関しては、若狭徹氏(若狭1990)と大木紳一郎氏の分析(大木2002)がある。両氏は、ともに形態的には外反の進行した口縁や著しい球胴化、文様的には波状文の乱れや廉状文の減少等、施文規範の崩壊・喪失を主な指標として型式変化を提示している(図8・9)。そして、若狭氏の分析では、井野川流域(図6での「群馬地域南部」に相当)の資料を用いての分析の結果、これらの型式変化の中における一貫した属性として、「体内面甕ミガキ技法」の採用が存在することを樽式系甕の原則としている(図8)。一方、大木氏は、飯島・若狭氏の指摘(飯島・若狭1988)を具現化する形で、沼田地域(図6での「利根地域」に相当)の地域型樽式甕の分析を行い、この地に特有の樽式甕の型式変化を唱えた点の特徴である(図9)。大木氏の分析は本地域を主体的に論じた内容ではないが、本地域においても大木氏の指摘

○地域区分について

(橋本・加部1994、若狭2000を引用)

- 1…群馬地域南部(榛名山東南麓の井野川流域を核とした地域。高崎市、群馬町など)
- 2…那波地域(利根川低地帯南岸地域。前橋市南部、高崎市東端部、玉村町など)
- 3…佐波地域(利根川低地帯北岸地域。勢多地域に至近。前橋市東部、伊勢崎市など)
- 4…新田地域(石田川・蛇川流域を核とした地域。太田市、新田市、尾島町など)
- 5…碓氷・片岡地域(碓氷川流域の高崎市西端部から安中市、松井田町など)
- 6…甘楽地域(鎗川流域の谷地域。富岡市、甘楽町、吉井町、妙義町など)
- 7…群馬地域北部(榛名山東麓で利根川と吾妻川の合流部周辺。渋川市、北橋村、赤城村、子持村など)
- 8…勢多地域(赤城山南麓地域。前橋市北東部、柏川村、新里村、富士見村など)
- 9…利根地域(利根川上流で、片品川との合流部。沼田市、昭和村、川場村など)
- 10…吾妻地域(吾妻川流域。中之条町・吾妻東村など)

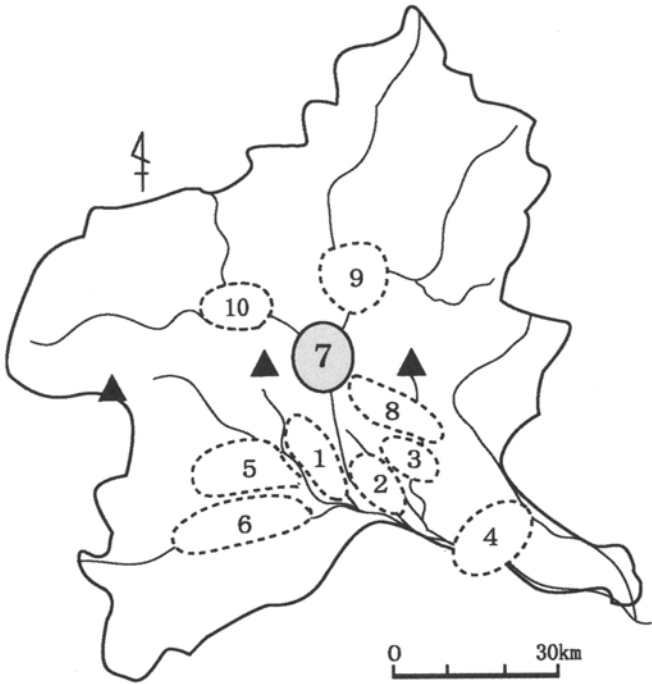


図6 地域区分図

		1 群馬南部										2 那波										3 佐波										4 新田										5 碓氷・片岡									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
弥生後期後半																																																			
古墳前期	古段階																																																		
	中段階																																																		
	新段階																																																		

		6 甘楽										7 群馬北部										8 勢多										9 利根										10 吾妻									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
弥生後期後半																																																			
古墳前期	古段階																																																		
	中段階																																																		
	新段階																																																		

現状では動向が不明瞭

①樽式要素 ②吉ヶ谷式要素 ③箱清水式要素 ④東海西部系供献器種 ⑤東海西部系装飾壺 ⑥S字甕  
⑦くの字口縁台付甕・刷毛整形平底甕 ⑧東海東部系壺・南関東系装飾壺 ⑨北陸北東部系壺 ⑩畿内系屈折脚高坏  
(※実線の太さは目安としてのボリュームを示したもの。破線は存在の可能性をしめしたもの。)

図7 在地系土器の消失と外来系土器の移動傾向(若狭2000を参考)

する、“口縁がやや伸長し、胴部形状が楕円形”を呈する、この型式の甕が多く存在することから、大木氏の型式変化分析は有効なものと考えられる。

なお、樽式壺(+樽式系壺)の型式変化についても、両氏ともに原則的には施文の退化、無文化の方向で変化するものとしての型式変化を提示している。

**S字甕**

これに関しては、田口一郎氏(田口1981・2000)の分析がある。田口氏は、形態的には口縁部、肩部、胴部の形状を、技法的には口縁部の刺突文、肩部横線、頸部内面の調整、胴部外面の調整の違いなどの属性を主な指標とし、Ⅰ～Ⅶ類に分類し、その型式変化を明快に論じた(図5)。さらに、氏は共伴する他系統の甕との関係から、Ⅰ期～Ⅵ期までを設定した。

田口氏はこの型式変化を濃尾平野の廻間編年(赤塚1990)との対応関係の検証や、その他の東日本各地へのS字甕の動向などを踏まえた上で、時間的な位置づけも補強した。田口編年は群馬地域南部の資料に基づく、同地域の編年であるわけだが、県内各地域の土器変遷を概観した場合にも概ね同様の型式変化に基づく土器様相に大きな齟齬は認められない(深澤1998・深澤2002)ため、他地域のひとつである、本地域においても田口氏のS字甕編年の型式変化を援用することに大局的には問題はないと判断し、指標のひとつとする。

**北陸系土器**

これに関しては、深澤・中里正憲氏による位置づけ(深澤・中里2002)、それを墓制や集落動向との絡まりで進化させた若狭徹氏・深澤の分析(若狭・深澤2005)がある。これらによれば、群馬県内各地域における北陸系土器のあり方は地域毎に分布の濃淡は認められるものの、編年の位置づけには関しては利根沼田地区<sup>(4)</sup>を除いては「古墳時代前期古段階」にはほぼ限られることがほぼ明らかになってきている(図10)。よって、想定外の資料が出土しない限り、現状においては群馬県内での北陸系土器の出土から、その時期を「古墳前期古段階」におくことは妥当と考えられる。よって、これについても本稿での指

標の1つとする。

**吉ヶ谷式系土器**

これに関しては、若狭徹氏の指摘(若狭1996)と深澤の検討(深澤1999)がある。若狭氏はこれらの資料について、縄文施文から無文へ、という変化を基準とし、型式変化を提示した。また、深澤の検討は、赤城山南麓地域の資料を手がかりに吉ヶ谷式系甕の型式変化を提示し、具体的には、「器面外面施文の縄文が喪失する変化」「口縁部の輪積み痕を残存しつつ、頸部の屈曲具合が「く」の字に移行していく変化」とでとらえ、最終的な残存型式としては、「口縁部の輪積み装飾」のみが残存するというものになるという検討である(図11)。この型式変化の流れは、県内各地での状況を概ねまかなうものと推測されること(深澤1998)から、本稿でも、傍証的に援用することとする。

なお、吉ヶ谷式系壺の型式変化についても、両者ともに原則的には縄文施文の喪失、無文化の方向で変化するものとしての型式変化を提示している。

(4) 資料の抽出・検討

ここでは、資料の共伴関係を元に検討を加える。

**資料分類**

**甕** 甕Aは樽式及び樽式系甕とし、規範をもつ櫛描文施文と、外反口縁・球形の胴部を呈するもの(=飯島若狭分類・甕Ⅳ～Ⅵ類)や、口縁がやや伸長し、胴部形状が楕円形を呈するもの(=大木分類・甕3・4類)を甕A1、規範を乱した櫛描文施文と短小口縁・進行した球形胴部を呈するものを甕A2(=若狭分類・甕Ⅶ類)、無文化したものを甕A3(=若狭分類・甕類Ⅷ、大木分類・5類)とした。甕Bは、北陸系甕である。所謂「千種甕」と呼称される端部を面取りした口縁と小さな底部、ハケによる整形が施された体部外面などを指標とする甕をひとまとまりとした。甕Cは単口縁甕である。これについては、「甕磨き手法の非採用」という点で甕Aとは区別した。甕Dは、吉ヶ谷式系甕とし、縄文施文があるもの(=深澤分類・JA～JB類)を甕D1、輪積み痕装飾のみを残すものを甕D2(=深澤分類・WA類)とした。

S字甕	樽式・樽式系土器		北陸系土器	吉ヶ谷式系土器
田口編年（田口2000）	若狹編年（若狹1990）	大木編年（大木2002）	若狹・深澤編年 （若狹・深澤2005）	深沢編年（深沢1999）
	樽式 3期	樽 3期		
S字甕Ⅰ期	樽式系Ⅰ段階	樽 4期	北陸系土器存在	吉ヶ谷式系Ⅰ段階
S字甕Ⅱ期	樽式系Ⅱ段階	樽 5期		吉ヶ谷式系Ⅱ段階
S字甕Ⅲ期	樽式系Ⅲ段階	樽 6期		
S字甕Ⅳ期				
S字甕Ⅴ期				
S字甕Ⅵ期				

表2 各編年の併行関係(私見)表



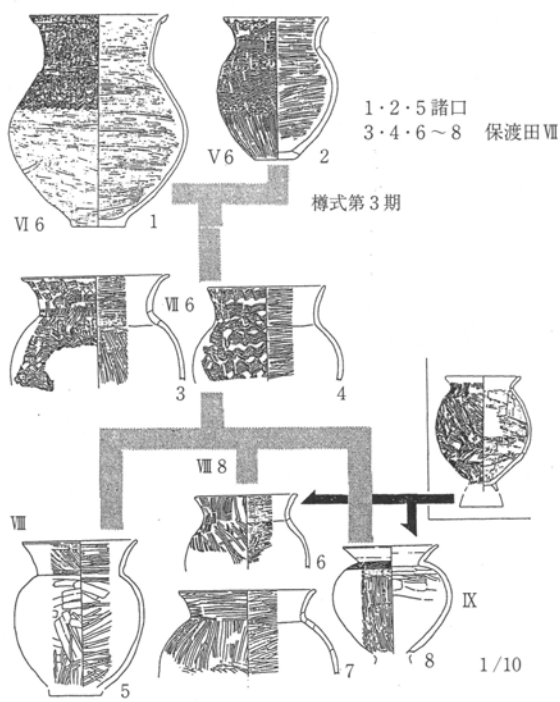


図8 樽式系甕の型式変化 (若狭1990)

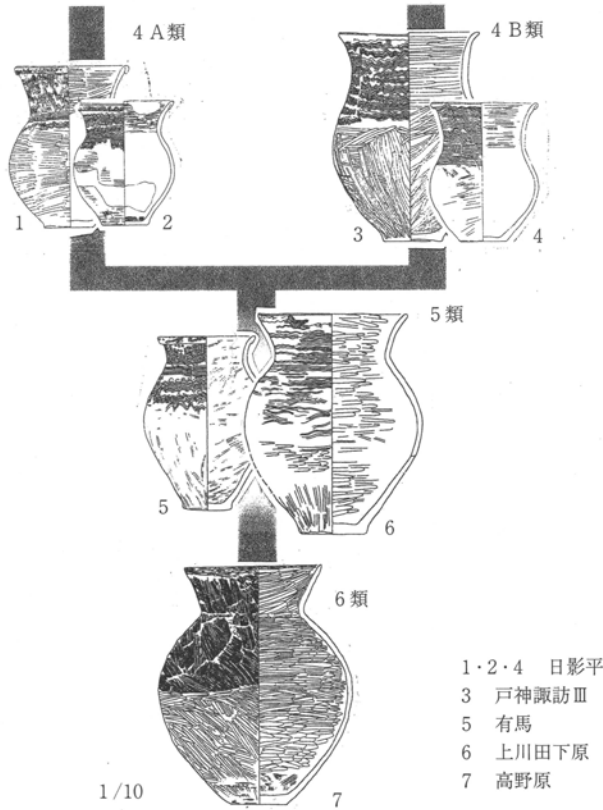


図9 群馬北部における樽式甕の組列  
(大木2002より抜粋、構成を一部変更)

7 群馬地域北部	
弥生時代 後期後半	
古墳時代前期	古段階
	中段階
	新段階

1 有馬85住 2・5～7 有馬82住  
3 有馬235住 4 有馬211住

図10 群馬地域北部における北陸系土器の出土様相  
(若狭・深澤 2005を引用・一部改変)

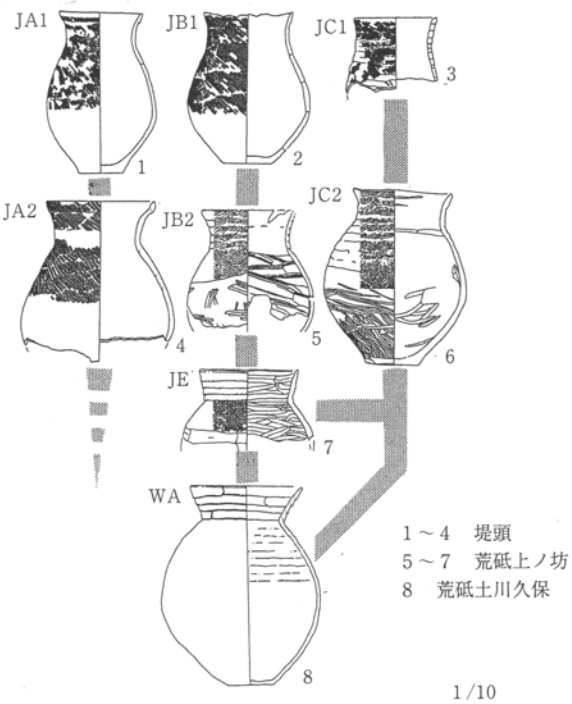


図11 吉ヶ谷式系甕の型式変化 (深沢1999)

甕EはS字甕とし、頸部内面の刷毛調整と肩部横線をもつものを甕E 1 (=田口分類Ⅱ類)、肩部横線は保持するが、頸部内面の刷毛調整を失うものを甕E 2 (=田口分類Ⅲb類)、肩部横線も失うものを甕E 3 (=田口分類Ⅳ類)、S字状口縁が上方に伸長化する所謂「拡張口縁」を有するものを甕E 4 (=田口分類Ⅴ類)、体部外面へのハケ整形が喪失し、ケズリのみになるものを甕E 5 (=田口分類Ⅶ類)とした。

**壺** 壺Aは樽式及び樽式系壺とし、外反する長い口縁と胴部への櫛描文施文をもつものを壺A 1 (=若狭分類・壺Ⅳ類)、櫛描文喪失がうかがえるものを壺A 2とした。壺Bは北陸系壺とした。壺Cは口縁短小及び胴部球胴傾向を指標とする壺とした。壺Dは吉ヶ谷式壺(深澤分類・壺Ⅱ)とした。壺Eは所謂「東海系壺」であり、有段口縁壺を壺E 1、伊勢型壺を壺E 2、口縁加飾壺を壺E 3、頸部加飾壺を壺E 4とした。

**高坏** 高坏Aは樽式高坏とした。高坏Bは東海系高坏とし、小型坏部のものを高坏B 1、大きく坏部が開く所謂「元屋敷系高坏」と呼ばれるものを高坏B 1とした。高坏Cは屈折脚高坏とした。

**鉢** 鉢Aは樽様式にある平底の鉢とした。鉢Bは北陸系鉢とした。鉢Cは東海系と考えられる外来要素を有する鉢とし、短く外斜する口縁をもつものを鉢C 1、伸長

する外斜口縁と縮小する体部をもつものを鉢C 2とした。

**埴** 埴Aは、所謂「ヒサゴ壺」とした。埴Bは小型で、体部が算盤玉形傾向にあるものとした。

**器台** 器台Aは受け部が無段のものとした。器台Bは受け部が有段のものとした。なお、器台Cは所謂「結合器台」等の器台A・B以外のものとした。

**小型台付甕** 小型台付甕Aは樽様式にある小型台付甕のことを指し、櫛描文施文のものを小型台付甕A 1、施文が喪失したものを小型台付甕A 2とした。

**片口** これについては、樽様式にあるものを指す。

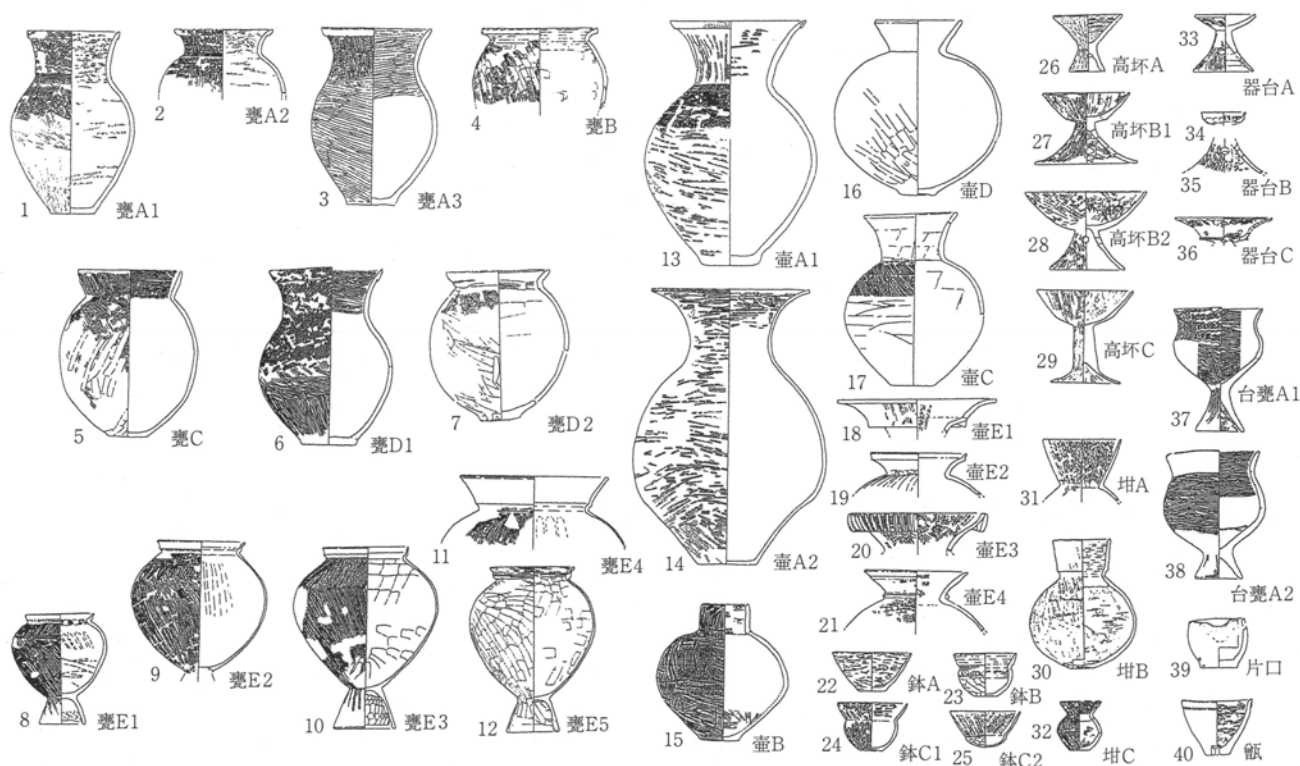
**甔** これについても、樽様式にあるものを指す。

#### 共伴関係の検証

上記の分類に基づき、共伴関係の認められる遺構資料を整理してみる(表3)と、次の変化と画期性を認めることができる。

第一の変化は「樽様式崩壊開始」の変化である。各器種とも(埴・器台は除外)、それまでAまたはA 1類で構成されていた組合せが、甕・壺においてはA 2やA 3への変化が始まるとともに、他器種においてもB～Eの参画が徐々に開始され、埴・器台の参画も開始される。

第二の変化は「S字甕の参画と樽式系の払拭」の変化である。定型的<sup>(5)</sup>な甕E 1が参入し、それとともに各器種において樽式系の要素が失われていく。



1・2・4・15・22・23・30…有馬 3…見立溜井 5・8・9・11・16～21・24・25・28・29・31・34～36…北町  
6・38…三原田三反田 7・10・32…滝沢天神 12・27・33…有馬条里 13・14・26・39・40…田尻 37…見立相好

図12 各器種 分類図 (全て1/12)



第三の変化は、「東海系要素の広がり」の変化である。S字甕は、所謂「安定した在地型S字甕」<sup>(6)</sup>である甕E 2～4が主体となり、他器種においても東海系要素の広がりを感じることができる器種構成となっていく。

以上の3つの変化にそれぞれ画期性を認め、「0期から3期」の時期設置を行うこととする。さらに、これを群馬地域南部の土器編年(若狭・深澤2005)と対比させるならば、0期を弥生時代後期後半、1期を古墳時代前期古段階、2期を古墳時代前期中段階、3期を古墳時代前期新段階に平行させることができよう。

なお、各器種の消長は表4の通りである。

#### (4) 遺跡における頻度分析

次に、共伴関係が不明確なものも含めて、各遺跡から出土の資料について、出土頻度を比較してみる。

ここで対象とする遺跡は、有馬遺跡、有馬条里遺跡、北町遺跡、それに滝沢天神遺跡とその周辺に点在する4遺跡<sup>(7)</sup>である(図13)。これらの遺跡について、調査報告書掲載の甕・壺・高坏について識別を行った。あらかじめ断っておくことであるが、この集計に関しては、掲載

資料という限定された資料によるものであるため、それによって詳細な解釈はできないものと考えており、あくまで、遺跡単位での大局的な傾向を把握するためだけに言うものである。こうした方法をあえて採用した理由は、各遺跡において、所謂「遺構外遺物」や「覆土遺物」といった遺物が多く認められ、それらをいかにして資料化できるかを考えたからである。

その結果は図14の通りである。ここからうかがえる傾向は次の通りである。

有馬遺跡は墓資料においてはほぼ樽式に限定される。また、墓以外の資料においても樽式及び樽式系が大半を占め、古墳時代前期的要素がほとんど認められない。外来系として北陸系甕の存在が一定量認められるが、他は極めて低調であり、東海系要素が認められる場合でも古相(甕E 1など)が目立つ。

北町遺跡は甕・壺において東海系と識別できる資料が卓越している。特にS字甕は新相(甕E 2～4)のものが圧倒的に卓越しており、壺においてもS字甕と共伴するような東海系要素をもった壺(壺E 1～4)が多く認

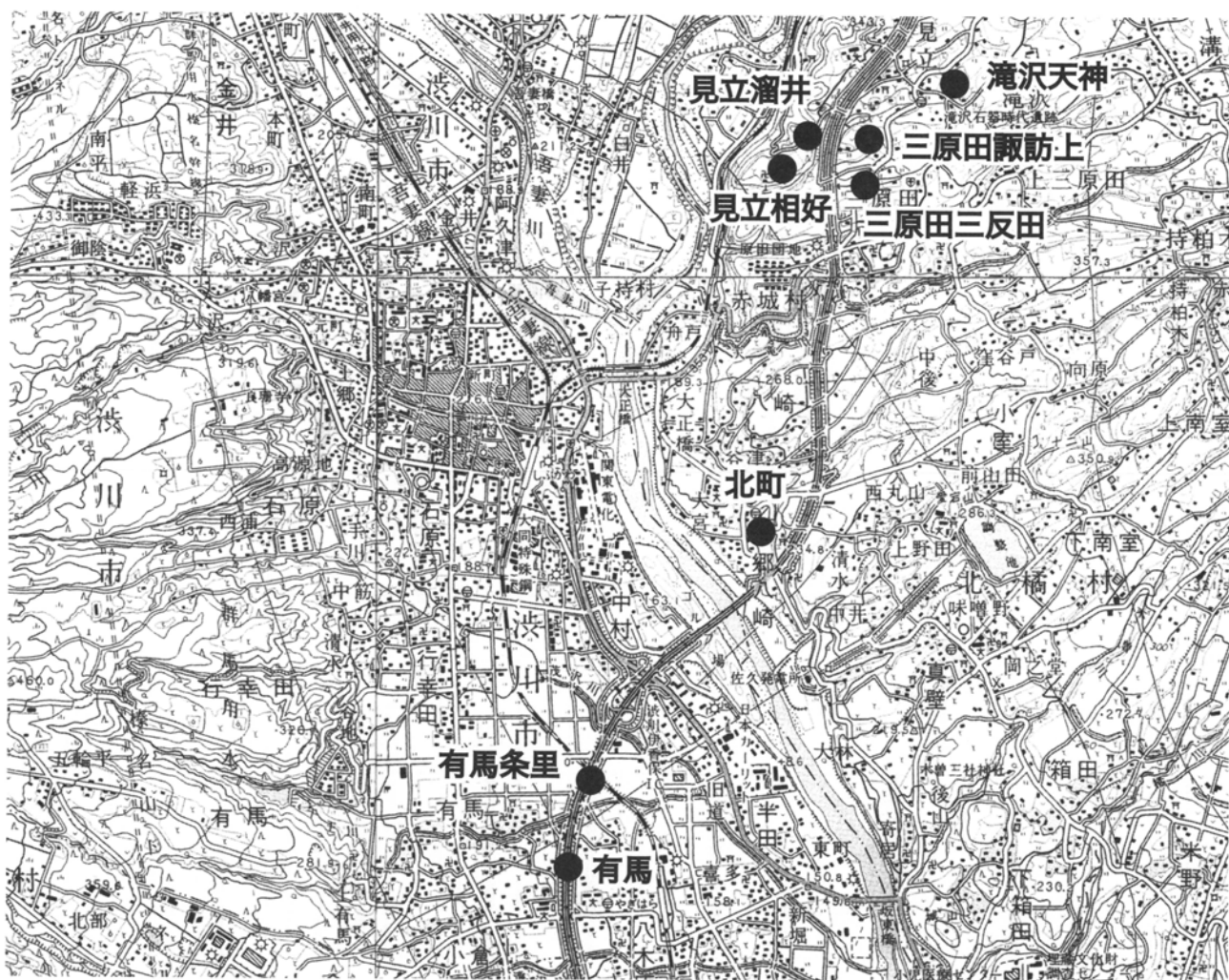
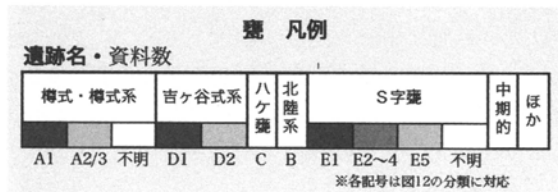
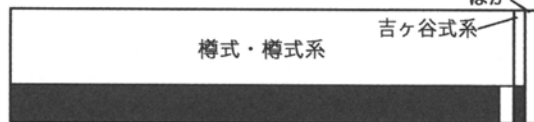


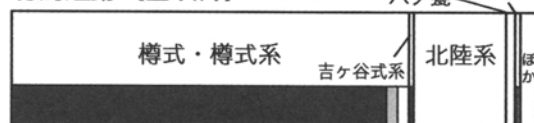
図13 分析対象遺跡の位置 (国土地理院 1/50,000「沼田」「中之条」「榛名山」「前橋」)



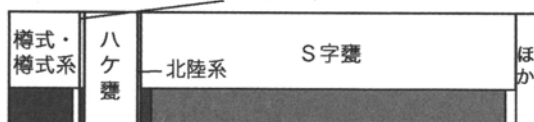
有馬遺跡（墓）・100



有馬遺跡（墓以外）・318



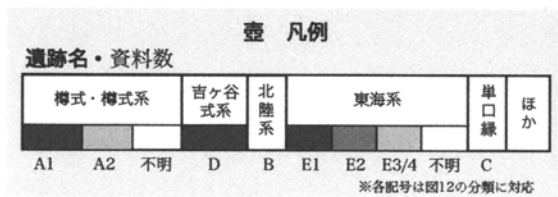
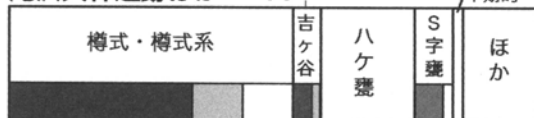
北町遺跡・415



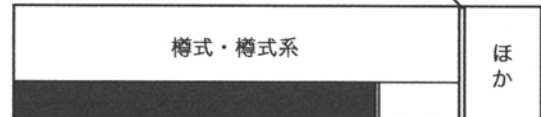
有馬条里遺跡・127



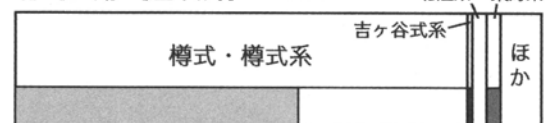
滝沢天神遺跡ほか・190



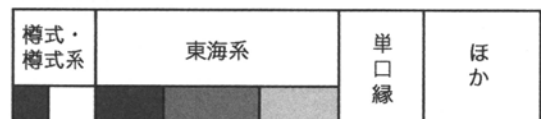
有馬遺跡（墓）・159



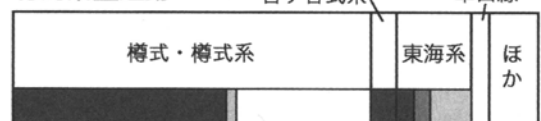
有馬遺跡（墓以外）・128



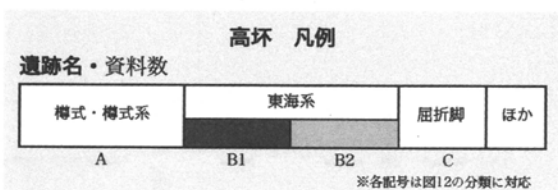
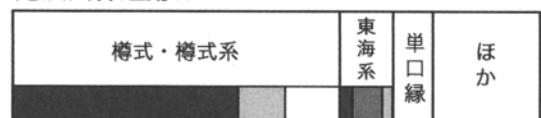
北町遺跡・116



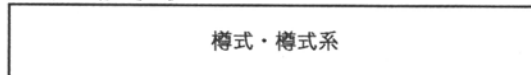
有馬条里遺跡・44



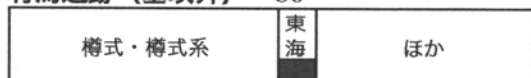
滝沢天神遺跡ほか・59



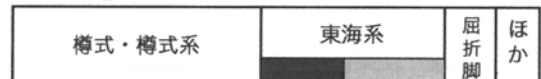
有馬遺跡（墓）・55



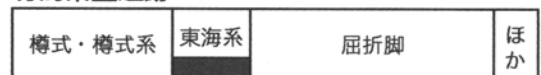
有馬遺跡（墓以外）・59



北町遺跡・31



有馬条里遺跡・80



滝沢天神遺跡ほか・69

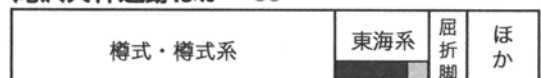


図14 各遺跡毎の甕・壺・高坏の出土頻度



められる。こうしたあり方は、本地域の遺跡としてはそれまで顕著に認められなかったものであり、本遺跡の存在性を特徴づけるものといえよう。なお、樽式及び樽式系は少量である。

有馬条里遺跡は、甕においては樽式及び樽式系がやや卓越しているものの、それらとは別系統と考えられるはハケ甕<sup>(8)</sup>が一定量認められる。この点はやや気がかりである。S字甕においては最新相(甕E5)の割合が高く、古墳時代中期的な甕<sup>(9)</sup>や、屈折脚高坏の一定量の存在も含めると古墳時代前期新段階、またはそれ以降にひとつのピークがあるようにも見られる。

滝沢天神遺跡・三原田三反田遺跡・三原田諏訪上遺跡・見立溜井遺跡・見立相好遺跡の5遺跡(以下、滝沢天神遺跡ほかと呼称)は、甕・壺・高坏においていずれも樽式及び樽式系の要素が色濃い。その中で古墳時代前期的な様相としては、S字甕等の顕著な東海系要素が認められるものの、目立った存在性はなく、むしろハケ甕の方が存在感を放っている。こうした外来系土器の存在は、比率的には高くないものの中期的な様相まで連綿と追うことが可能であり、その継続性を想像することが可能である。

以上の理解は、かならずしも共伴関係を伴わない資料に基づいているため、細微な議論は不可能である。しかし、前述したような既説の編年観を援用すると図15のような推移を抽出することができよう。

(5) 群馬地域北部(渋川地域)の様相

ここまで把握してきた属性を踏まえた上で、時期毎の様相と特質を指摘する。

**時期毎の様相**(文中の数字は全て図16のもの)

**0期 弥生時代後期後半**

0期は比較的安定した樽式3期後半の時期である。規

範を保持した櫛描文施文の甕(1・2)・壺(4)・台付甕(3)や赤彩高坏(5)、そして片口(6)、鉢(7)、甑(8)といった樽様式の基本構成を維持している<sup>(10)</sup>。有馬遺跡、田尻遺跡(長谷川1999)、見立相好遺跡(小林ほか2005)などが主な遺跡をしてあげられる。

若狭編年弥生V-3期(若狭1996)、大木編年樽式3期(大木2002)に相当する。

**1期 古墳時代前期古段階**

1期は樽様式の構成が崩壊しはじめる時期である。その症状は櫛描文施文の甕等においては、文様の乱れ(9)や無文化(10・14)に主として認められる。加えて、他系統の土器の器種構成への参入が顕在化しはじめる。参入する系統は、北陸系や吉ヶ谷式系等の土器であることが資料からうかがえる。そして、参入に際して興味深いことは、そのあり方が2相あるという点である。その一つは、赤城山西麓丘陵部への吉ヶ谷式甕(11・13)等の参入であり、もうひとつは、榛名山東麓山麓部への北陸系土器の複数器種(24・25・30・31・34・35)の参画である。また、この時期の外来系土器の参画のあり方においては、次期に見られるような東海西部色の強さは認められない。有馬遺跡、三原田三反田遺跡、見立溜井遺跡(都丸・茂木1982)などが主な遺跡である。

田口編年S字甕I・II期併行(田口2000)、若狭編年樽式系I・II段階併行(若狭1990)に相当する。

**2期 古墳時代前期中段階**

2期は古相のS字甕(甕E1)の参入とそれに伴う弥生系属性のより一層の払拭が進行する時期である。定型化した古相のS字甕(40)やその影響下にうまれたS字甕(41)が甕形式の基幹を構成する。また、一方で、樽式系甕(38)や吉ヶ谷式系甕(39)が形態的・技法的により一層土師器化を志向し、本来保持していた弥生系の属

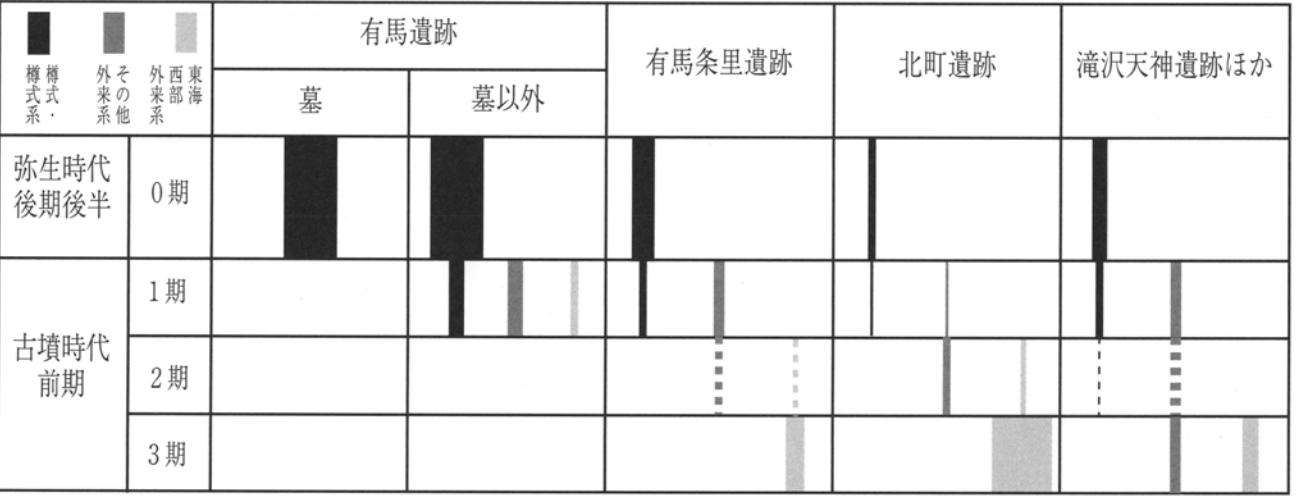
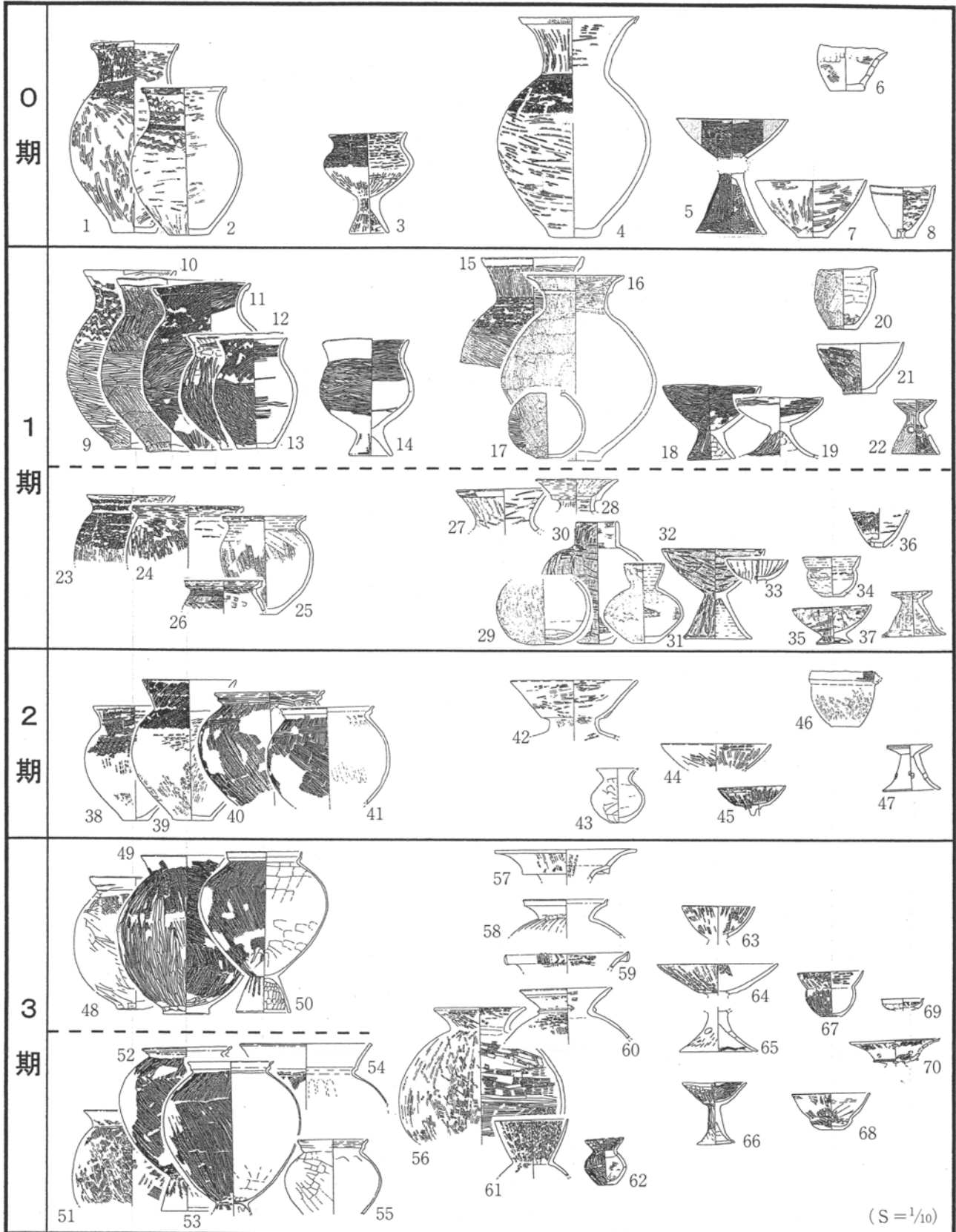


図15 出土類土分析から見た各遺跡の消長推測





1・3・4・6～8…田尻Y-1住 2…有馬83住 5…見立相好Y-18住 9・10・15・16・21…見立溜井H 6住 11・14・18・19…三原田三反田4住  
 12・13…三原田三反田2住 17…見立溜井H 4住 20・22…見立溜井H 7住 23・28・29・33…有馬89住 24・25・30・36…有馬234住  
 26・27・31・32・34・35・37…有馬82住 38・39・41～44・46…北町A 3住 40・45・47…有馬条里371 48・66…滝沢天神20住 49・50・62…滝沢天神2住  
 51・53・58…北町C 12住 52…北町C 2住 54…北町A 4住 55…有馬条里268住 56…北町B 23住 57・60・63～65・68…北町C 6住  
 59…北町C 11住 61・67・69…北町C 10住 70…北町C 17住

図16 群馬地域北部における古式土師器の様相

性を喪失していく。

なお、この2期は資料が希薄であり、明確な中核的遺跡が挙げられない。だが、先に挙げた遺跡毎出土頻度の統計(図14)から強いて挙げれば有馬条里遺跡にその可能性が認められる。

田口編年S字甕Ⅲ期併行、若狭編年樽式系Ⅲ段階併行、大木編年樽式6期、深澤編年吉ヶ谷式系Ⅱ～Ⅲ段階に併行に相当する。

3期 古墳時代前期新段階

3期は所謂「東海西部系」土器<sup>(11)</sup>が複数器種において参画する時期である。その参画のあり方は網羅的とも想定される。無論、それまでの在地色を席卷するという強烈的なものではなく、参画割合には差異が認められる。だが、S字甕を例にとれば、丘陵部でも(50)、山麓部でも(52・53)でも型に個体誤差の少ないものが組成参画していることから、安定感のある広域的定着を彷彿とさせる。他器種においてもバリエーションをもった壺群(57～60)や小型器種(63～69)らも定型的な型式がひろく組成参画している。こうしたあり方は、同様にそれまでの在地色に取って代わった土器様相をもつ1期の状況のように、複数の型がピンポイント的に参入したきた状

況とは大きくことなる。なお、この時期の中でS字甕の最新相(55)や屈折脚高坏(66)などが姿を現すことから、古墳時代前期の様相がこの3期ののち、ほどなく終焉を迎えることが想像できる。北町遺跡・有馬条里遺跡などが主な遺跡として挙げられる。

田口編年S字甕Ⅳ～Ⅵ期に相当する。

(6) 地域編年からの位置付け

以上、地域編年とその様相を検討してしてきた。その結果、滝沢天神遺跡2号住居出土の古式土師器は様相推移図(図16)で明らかのように、その位置を「本稿時期の3期」におくことが適切と考えられる。それは田口編年S字甕Ⅳ～Ⅴ期に併行する時期に位置させることが可能であり、結果として、冒頭で推察した、「既説による位置づけ」とも結果的にはほぼ同じと言うことになった。

さらに、赤城山西麓の丘陵部に所在する本遺跡にS字甕が組成参画する状況については本稿3期の様相を認識すれば、ごく必然的なことであり、そのことから、本資料の位置づけが蓋然性の高いものであることが裏付けられたといえよう。

このことを本稿の結論とする。

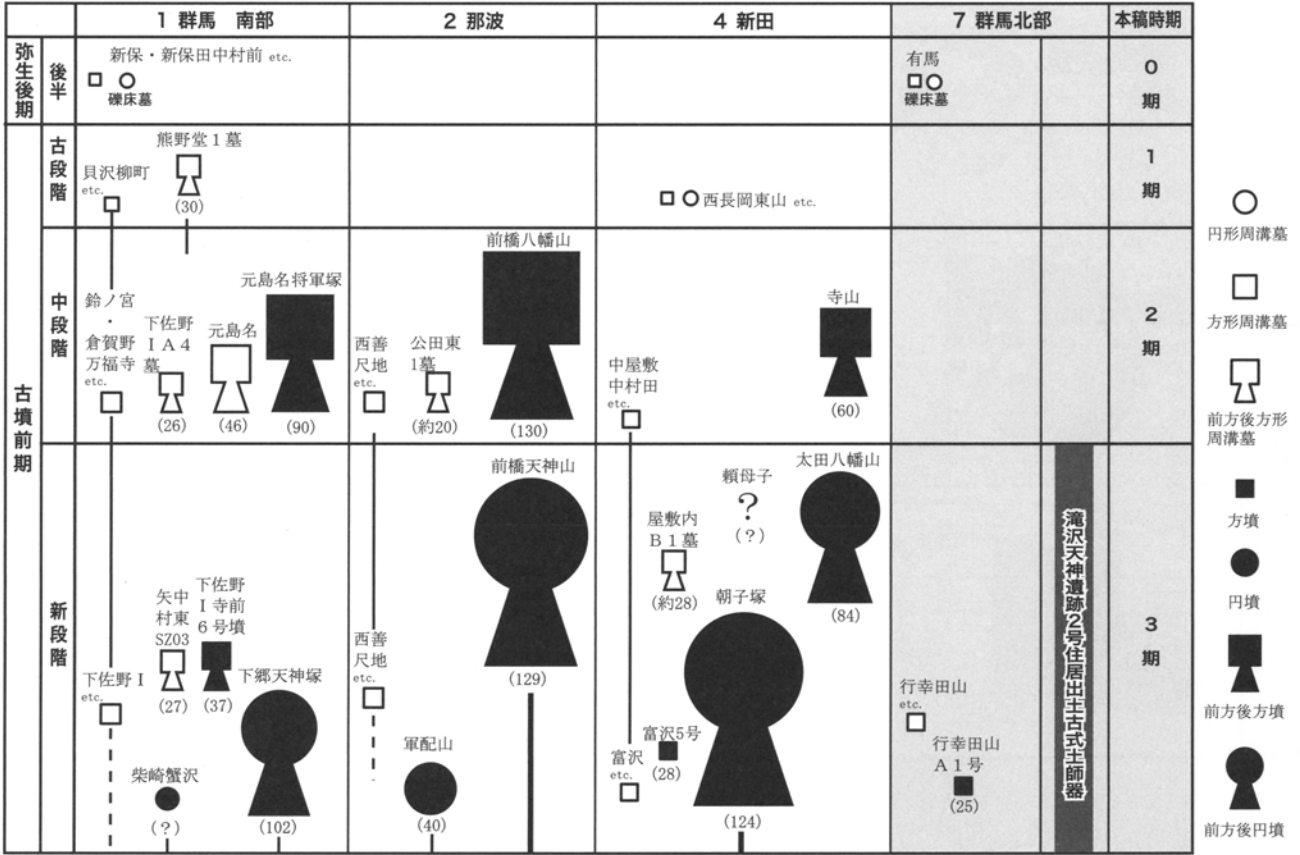


図17 滝沢天神遺跡2号住居出土古式土師器の位置 (若狭・深澤2005に加筆)

## 5 おわりに

本稿では、滝沢天神遺跡2号住居出土の古式土師器を、地域編年を見直す中で位置づけ、ひとつの結論を導くことができた。その点は成果といえよう。

ところが、今回の検討によって新たな問題が浮き彫りとなった。それは、「本稿の2期」とした時期の遺跡の希薄さである。この時期を設定する作業段階でのイメージでは、これに併行する時期の群馬地域南部において東海西部色が濃厚なりつつある状況も意識していたことから、本地域においてももう少し東海西部色が抽出できるものかと思っていた。しかし、既出の資料を複数の方法で検討しても、その存在性を充足することはできなかった。このことは何を意味するのか？ということが新たな問題なのである。画期の設定に難があったのか？、あるいは東海西部色以外のものが主体をなすのか、それとも濃厚な東海西部色をもつ遺跡がこの渋川の地中に未だ眠っているのか？

今後の動向を注意深く見つめながら、この問題に真摯に取り組むつもりである。

※

なお、本稿を草するあたり、次の方々に多くのご助言、ご協力をいただきました。文末ではありますが、お礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

荒木勇次、大木紳一郎、小林良光、田口一郎、長谷川福次、若狭徹

## 参考文献

- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター  
青木和明・飯島克巳・若狭徹 1987 「箱清水式と樽式土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣出版  
荒木勇次 2000 「群馬県・北毛地域の概要」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年』  
飯島克巳・若狭徹 1988 「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9  
大木紳一郎 2001 「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『元総社西川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
大木紳一郎 2002 「群馬北辺の弥生社会—後期弥生社会の分析から—」『研究紀要22』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
小林修・長井正欣 2001 「三原田三反田遺跡」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書』第16集 赤城村教育委員会  
小林修・三浦京子 2004 「三原田諏訪上遺跡Ⅱ」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書』第26集 赤城村教育委員会  
小林修 2005 「滝沢天神遺跡—A地点—・棚下ひばり塚」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書』第34集 赤城村教育委員会  
小林修・三浦京子 2005 「滝沢天神遺跡—B地点—」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書』第40集 赤城村教育委員会  
小林修・中里正憲 2005 「滝沢天神遺跡—C地点—・滝沢江戸久保遺跡」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書』第42集 赤城村教育委員会  
小林修ほか 2005 「見立相好遺跡Ⅰ・Ⅱ」『赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第38集』赤城村教育委員会  
小林良光 1988 「行幸田山遺跡」渋川市教育委員会  
佐藤明人 1990 『有馬遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
坂口一 1989 『有馬条里遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
田口一郎 1981 「元島名将軍塚古墳」高崎市教育委員会  
田口一郎 1998 「新たな土器が成り立つとき」『人が動く・土器も動く』第2回特別展図録 かみつけの里博物館  
田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』  
都丸肇・茂木充視 1985 「見立溜井遺跡・見立大久保遺跡」赤城村教育委員会  
橋本博文・加部二生 1994 「群馬県」『前方後円墳集成 東北・関東』山川出版社  
長谷川福次 1999 『八崎の寄居・田尻遺跡』北橘村教育委員会  
長谷川福次 1996 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橘村教育委員会  
若狭徹 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1 群馬土器観会  
若狭徹 1996 「編年 群馬県地域」『YAY! (やいっ!)』弥生土器を語る会  
若狭徹 2000 「S字口縁甕波及期の様式変革と集団動態—群馬県地域の場合—」『第7回東海考古学フォーラム S字甕を考える』  
若狭徹 2002 「古墳時代の地域経営—上毛野クルマ地域の3～5世紀—」『考古学研究』49-2  
若狭徹・深澤敦仁 2005 「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会  
深澤敦仁 1998 「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』16  
深澤敦仁 1999 「「赤井戸式」土器の行方」『群馬考古学手帳』9 群馬土器観会  
深澤敦仁 2001 「群馬県の石製品・石製模造品製作址について」『考古聚英 梅澤重昭先生退官記念論文集』  
深澤敦仁 2001 「2号・4号住居跡出土土器について」『三原田三反田遺跡』赤城村教育委員会  
深澤敦仁・中里正憲 2002 「群馬県玉村町所在・砂町遺跡出土の北陸系土器の位置づけをめぐって」『研究紀要』20 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
深澤敦仁 2002 「赤城村出土の古式土師器の位置付け」『赤城村歴史資料館紀要』4 赤城村歴史資料館  
深澤敦仁 2005 「関東平野北西部」『東日本における古墳の出現』六一書房

註

- (1) ただし、田口氏は自身の編年を「井野川流域」の資料に依る「井野川流域」の編年とするため、その取り扱いには慎重を期さねばならない。
- (2) この時期設定については、過度の細分案であるという指摘もある(大木2001)が、その点については現在のところ、深澤自身も認めており、再検討中である。
- (3) 演繹的に考えることが許されるならば、高塚の成立が行幸田山A区1号墳の築造までないとすれば、高塚の成立しない赤城山南麓地域同様、この地域もS字甕自体は客体的存在であり、それ以外の様相を考慮しなければならないのか、という考え方もできてしまう。
- (4) 利根沼田地区においては町田小沢Ⅱ遺跡1号住居出土の千種甕のように、明らかに「弥生時代後期」に存在するものが存在している。なお、現在では明らかになっていないが、吾妻地区でも同様の資料の出土の可能性が見込まれる。
- (5) 有馬遺跡82号住居出土の甕の中には、S字甕に用いられる調整技法を用いて作られた甕が存在する。技法の特徴からはS字甕の古相(本稿の甕E1)とみることの可能であるが、厚甕であることから、非定型のものと扱うことにした。
- (6) これについては、田口分類のS字甕Ⅲ～Ⅴ類をそれとして扱うこととする。
- (7) 滝沢天神遺跡周辺には、同一地形の半径500m程度の範囲の中に同時期の小規模遺跡が集中する。それは三原田三反田遺跡、三原田諏訪上遺跡、見立溜井遺跡、見立相好遺跡である。よってこれらを含めての分析の方が本稿では適切と判断した。
- (8) ここでいう「ハケ甕」とは調整技法にハケを用いている甕の総称として用いることとする。よって、平底。台付の区別はしていない。こうしたまとめ方を理由は、甕磨き技法を固守する樽式系甕、そしてS字甕とそれぞれ区別する意図を持ったからであらである。
- (9) 中期的な甕とは単口縁で球胴の体部に平底をもつ形態であり、技法的には体部にケズリ調整を加え、磨きを採用する甕のことを指し、所謂「5世紀的な甕」というものである。
- (10) 0期においても、田尻遺跡Y-1住の出土資料のように、壺・甕の無文化が一部に進行する場合も見受けられる。
- (11) この段階の「東海西部系」の土器には、東海からの搬入品はほぼ皆無と想定する。東海西部系要素が群馬において在地化した土器がすべてと思われる。